

「おいしいお米はうまいです」

C.BOWLINN

小学校の高学年だった頃のこと

自宅は学校まで片道3キロくらいあって
行き帰りには、まあまあいろんな道草の思い出が

そのうちのひとつ

ちょうど中間地点くらい 道路脇の広い空き地にて・・・

その日の朝は大雪が降り、その空き地に30センチほどの雪が積もりました

学校からの帰り道、自然発生的に同級生が集まってきた

即席でルールを決め、雪合戦がはじまった

新雪で雪玉はつくり放題

小学生でも高学年にもなれば、みんなかなりのスピードで投げつけてくる
しかも思いっきり固くして・・・

正直、当てられるのは避けたい 特に顔面・・・

とはいえ逃げてばかりもいられない

広い空き地に隠れる場所はない

攻撃は最大の防御 こっちも必死で投げつける

敵チームの山田くんは、スポーツ万能

雪玉が勢いよくビュンビュン飛んでくる

当たると強烈に痛いだろう

ぼくと同じチームのヤノッチは、負けん気は人一倍強いものの、野球経験もなく

投げる玉は遅いし、逃げ方も下手くそでやられっぱなし

それでも楽しそうに闘っていた

その時だ

至近距離に山田くんが迫ってきた

陣地の最前線で雪玉をつくっているヤノッチが危ない

仲間のリーダー格、キシタニ君が大声で叫ぶ

ヤノッチー！逃げろ～！！

気づいたヤノッチは、背中を見せ無抵抗に逃げた

そしてもうだめだと思ったのかアルマジロのように両手で頭を抱えながら身をかがめた

その姿を見てヤノッチだけでなく仲間みんなが万事休すとおもったが、山田くんの投じた雪玉はその的を大きく外れ、道路のほうに飛んでいったまだ

まだ路面の状態は悪かったので、車はスピードを抑えてノロノロと走行していた

山田くんの放った雪玉は、運の悪いことに黒塗りの高級車のドアに直撃し轟音が響いた

停車して黒いサングラスをかけたパンチパーマをかけた大男がゆっくりとこちらに向かってきた

一同、雪合戦でかいた汗が冷え、いっきに凍りつく

(こ、こわっ 絶対やばい人だ)

巖つめのスーツを着た大男が、詰め寄るよって来た

「いま雪投げたん 誰な？」

一同、フリーズして身体が動かない 俯いたまま沈黙

容赦なく、さらに怒号が飛ぶ

「聞こえんのか？誰じゃ言うとなんじゃあ～」

ビクッ

一段と大きくなった声に身も心も震えた

ドスが利いてて迫力がある大人の声をはじめてきいた

地震、雷、火事、おやじというけれど、父親に怒られたときの声を超えていた

雷が落ちたようだ

こんな声を聞いたら、より萎縮してしまっって声なんか出せない いや出ない

「おまえら、耳も口もないんかつ 誰じゃ言うてるやろー」

もう殺されてしまうんじゃないかという恐怖

心のなかで悪魔が囁いた

(山田くん 早く名乗り出たらよいのに)

その山田くんは、じっと下を向き真っ青な顔をしている

雷神の男は、その場の雰囲気から張本人が山田くんだということを察したのか

山田くんのほうを向いて問い詰めた

「ん？ お前か〜？」

山田くんはプルプル震えている

山田くん「あわわ・・・」

何か口にしようとしているが言葉にならない

二人の重苦しい空気に割って入るように透き通った声が！

「ごめんなさい」

男は、声のほうに振り向く

「誰というよりも、こんなところで遊んでいたここにいる全員が悪いです
すみませんでした」

声の主は、ヤノッチだ

謝ると同時に、深々と頭を下げるヤノッチ

それをみて、慌てて全員頭を下げた

「ごめんなさい」

申し合わせもなく一同一斉に声がでる

男は、全体を見渡した

そしてもう一度山田くんを凝視する

そんなに長くなかったかもしれないが途方もなく長く感じた

冬の空は天候がかわりやすい 牡丹雪が降りだした

男は一度空を見上げ、ゆっくりと話はじめた

「こんなとこで 雪投げて遊んだらどうなるか お前らくらいの歳になったら分別できる
やろ？」

声のトーンは落ちてはいるものの、底冷えしそうな殺気がある

「はいっ」

またまた自然に声がそろろう

「今回だけは赦してやる 次は赦さん わかったなっ！」

「はい すみませんでしたっ」

深いお辞儀をしたまま男が立ち去るのを待った

黒塗りの高級車は走り去っていった

チェーンの音が遠ざかる

別の車のチェーンの音しか聞こえなくなり、ようやくと頭をあげた

みんなの顔に安堵の色が浮かんでいた

弛緩して山田くんは泣き崩れた

ヤノッチは、興奮し高潮しているようにみえたが堂々として恰好よかった

雪投げでは一番ダメダメだったヤハラくんみんな救われたのだ

その姿は、眩しく頼もしく上級生のようなだった

.....

雪合戦跡地は、お米屋さんの倉庫になっている

同級生ヤノッチから「連帯責任」というものを教えてもらった

その後の人生においても、幾度かこういう局面に遭遇することがある

そんなときはいつもヤノッチをおもいだす

そのたび勇気をふりしぼり、一步前に踏み込むように心がけている

そうしないと、その日のご飯がおいしくない

そうそう

そのお米屋さんの倉庫には大きな看板が立っている

キャッチコピーは『おいしいお米はうまいです』

おわり